「ODA民間モニター」の体験 ―― 長崎営業所長／緒続真人

長崎営業所長の緒続真人（おつづき　まさと）さんは、平成17年度の「ODA民間モニター」に選ばれ、去る7月23日から7月30日の間、パプアニューギニアに訪問団（15名）団長として外務省から派遣されました。今回、緒続所長から現地での体験についてリポートしてもらいました。

緒続所長

［パプアニューギニア］

日本列島を南下し、赤道を過ぎたところに恐竜の形をしたニューギニア島が現れます。この右半分がパプアニューギニアです。　訪問したのは首都ポートモレスビーと、そこから飛行機で東北に約2時間行ったラバウルです。

両訪問地においてODAで建てられた飛行場、病院、学校等、また、JICAから派遣されたシニアボランティアや青年海外協力隊員の活動現場等を見てきました。いずれの場所でも関係者（現地人、日本人）と懇談し、ODAの実態をつぶさに把握することができました。

▲成田空港の結団式で団長挨拶する緒続所長（団員は教師、医師、大学生等多彩な顔ぶれ）

▲日本国旗を持っての歓迎
（この後「さ～らばラバーウルよ……」の大合唱）

［同胞の屍が今尚眠る島ラバウル］

ラバウルには先の大戦時、15万人もの日本軍が占領駐留し、連合軍との熾烈な戦いを繰り広げました。

その果てに、他の太平洋諸国に構えた日本軍と同様悲惨な最期を遂げ、今も尚、おびただしい同胞の屍が葬られないまま眠るところでもあります。我々も「戦没者の碑」に慰霊し、平和を誓いました。

［さ～らばラバーウルよ、また来るまでは……］

滞在中は忘れられない数々の思い出があります。その一つがラバウルでの出来事でした。「さ～らばラバーウルよ、また来るまでは……」日の丸の旗を打ち振っての大合唱が我々を待っていたのです。日本のNGOオイスカ研修センターでの歓迎です。当時の軍歌を懸命に歌う研修生の健気な姿に目頭が熱くなりました。

［目が合うと微笑んで手を振る］

とにかく人懐っこい人たちです。目を合わせると、必ず手を振って微笑みかけてきます。あまりの親しさに、物をねだる、売りつけるなどの下心を警戒しますが、その心配は全くなし。物乞いも皆無です。この点は他の発展途上国とは様相が異なります。部族単位の互助意識が高く、貧しさゆえの依存は外部からは受けない、というところにあるようです。なにしろ700の部族が存在すると言われています。

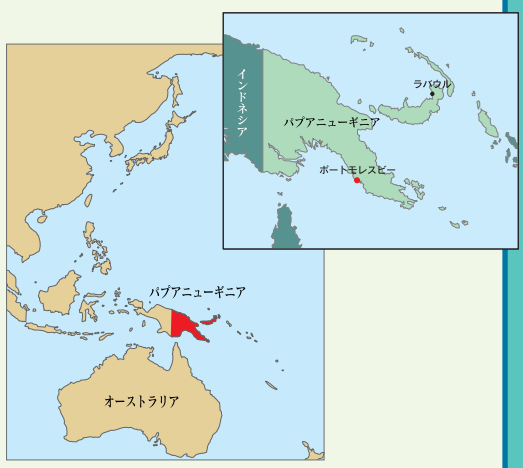
▲人懐っこい人々（子供も大人も、目が合えば向うから手を振って挨拶してくれる。）

［国際支援は純粋な思いの具体化］

僅か一週間の滞在でしたが、発展途上国が故の問題をこの眼で見て、そして触れ、その悩みや苦しさを目の当たりにしました。それは、病気、乳児の死亡、資源の枯渇、遅れたインフラ、貧富の差……様々にして累々たる問題です。居合わせたなら誰でもが、同じ人間としてどうかして助けてあげたいと思うはずです。国際支援（ODA）はこの純粋な思いを具体化していくことであると実感しました。

その支援がどの様な形で行われ、成果が上がっているのかを一般人の立場でモニターするのが我々の任務でした。

そして今回、ODAのこの国に於ける貢献を目の当たりにし、日本の果たすべき役割と責任について考える事が出来ました。（興味ある方は、モニター報告書を下記に示す外務省ホームページよりご覧下さい。）



▲パプアニューギニア国会議事堂前
（会期中の国会に招待され、議長から首相や閣僚などに紹介された）

［ODAを通して世界を見る］

これから海外に行く機会は益々増えると思います。発展途上国、特に東南アジアに行かれたとき、いたるところに日本からの支援があることに思いをめぐらせてみてください。外務省のホームページには当該国への支援状況が詳しく説明されています。支援は外交の側面です。これを理解し、その国との関わりかたを知ることで、日本人としての誇りと自信を蘇らせ、また地球人として責任ある世界観が広がってくると思います。

追記：（1）ODA（政府開発援助）やODA民間モニターについては次の外務省ホームページを参照ください。
http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/index.html
（2）平成17年度ODA民間モニターの活動状況は10月より次のとおりテレビ（BSデジタル）放映予定です。
（緒続さんが派遣されたパプアニューギニアについては11月3日から4回シリーズで放映）
BSジャパン：毎週木曜20時55分から21時（5分間）